# 組子細工の技を引き継ぐ

日本建築独特の装飾技法――組子細工。釘を使わず、切り込みやほぞを入れた細い板を、ノミやカンナで調節しながら手作業で組み合わせて精緻な紋様を編み出していく。日本人ならではの手先の器用さから生まれた伝統工芸の一つだ。300年の歴史あるこの〝技〟を引き継ごうと、青森市の若手建具職人(藤田建具工芸)・藤田祐貴(ゆうき)さんが、〝組子への道〟を歩み出した。

## 木で作る精緻な幾何学模様 コンマ1(ミリ)の〝精度〟が命

今年(2017年)、テレビで放映された『クルーズトレイン「ななつ星in九州」』の番組で、列車内に飾られた豪華な組子細工が話題を集めた。「ななつ星」はJR九州が運行する豪華寝台列車で、その『ラウンジカー「ブルームーン」』の壁面の装飾に組子が採用されたのだ。時代の流れとともに和室の障子や襖、欄間に使われなくなった日本の伝統工芸が、豪華列車の車内に蘇ったのである。

「見ましたよ。素晴らしかったですね」

そう話すのは、今年初めから組子の指導を受けている建具職人(藤田建具工芸)の藤田祐貴さんだ。師匠は、『全技連マイスター』(2009)にも選ばれた父親の藤田秀晴氏。23歳のときに建具工芸研究所(さいたま市)で組子を学んで以来、一筋、青森ヒバで精緻な幾何学模様を生み出す技術の研鑽を積んできた熟練技能士である。

ご長男の祐貴さんが、東京から帰郷したのは26歳のとき。藤田建具工芸に就職して9年になる。組子に取り組み始めたのは、父親が現役のうちに技を引

き継ぎたいという気持ちが膨らんできたから、という。逆に言えば、9年の経験を積んでようやく組子に向き合えるようになった、とも。それだけ組子は技術の〝高み〟にあるのだ。

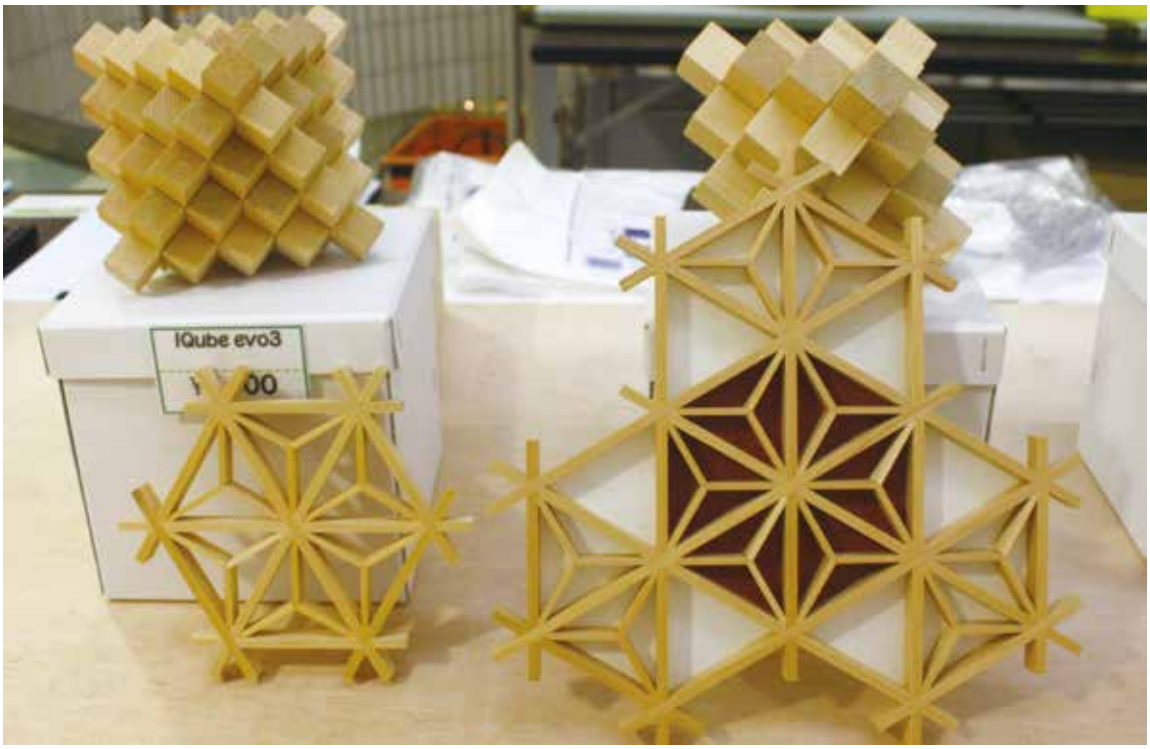
これは試作品です、と祐貴さんが、テーブルに置いてあった、細く長く薄い板を何本も斜めに交差させた、いわば組子の〝基本〟を目の高さに持ち上げた。「あ、ここですね。ここが、ちょっと曲がっているでしょう」。そう言われて、見てみると、確かに、指摘されて初めて分かるほどに、一か所がやや曲がっている。

「精度が命、なんです。コンマ1ミリ違っていても許されない世界です」

細いヒバの板を切り、組み合わせて美しい紋様を創り出す

## 「新築中の家に組子を」工房を訊ねてきた施主

青森市の観光物産館アスパムで開催された「2017アスパム秋まつり」の「あおもり民芸品製作体験・販売コーナー」




細く長く薄い板を何本も斜めに交差させた組子の〝基本〟

「2017アスパム秋まつり」の会場で組子づくりの指導をする藤田祐貴さん

で、藤田秀晴氏と祐貴さんが、組子づくりの指導をしていた。組子細工を知ってもらおうと、製作体験を通してPR活動を展開しているのだ。2010年に同じアスパムで開かれた家具展示会で行って以来、今年で8回目になる。

「仕事があってこそ職人の技は生かされるのですが、組子の注文はほとんどありません。今は新築住宅に和室さえなくなってきていますから、待っていても仕事はきません」と藤田秀晴氏は現状を話した上で、「組子を体験したからといってすぐに仕事に結び付くわけではありませんけど、やはりこっちから働きかけなければ育つものもないわけです。薄いヒバの板に触ってるだけでもいい気持ちになりますよ。組子は、木の魅力でもあるんです」

体験イベントのブースに展示した組子の衝立（ついたて）を目にしたのか、あるいはインターネットで検索したものか、それとも組子に惚れ込んだ外国人が憧れの日本の職人に会いにくるというテレビ番組を見たのかは分かりませんが――と祐貴さんが前置きして、今年の春先に、藤田建具工芸を訪ねてきたという男性の話をしてくれた。

高い技術が生かされた組子の照明。柔らかな光に心が安らぐ

「組子の戸を付けたい、と来られたんです。自宅を建てているそうなんですが、工務店の人ではなく、施主ご本人が住所を調べてわざわざ訪ねて来られたんですよ。居間の入り口戸を組子にしたいって。高さが２ｍの一本引き（片引き）戸を製作して納品しました」

改装するホテルなどから組子の引き合いはあるそうだ。受付の背後の壁面とか、カウンターの正面の装飾にしたいとか。ただ問題は納期である。いつも時間が足りない。「通常の建具の仕事を一時お断りして取りかかればなんとか間に合わせられるけど、でも、それは次につながる仕事ではありません」と藤田秀晴氏。ホテルの仕事は臨時で、あくまでも住宅の建具が本業なのだ。

アスパムでの製作体験ブースに展示された衝立。見事な紋様の出来映えが人目を惹いた

## 何という精緻さ豪華さ 求められる感性と技術

アスパムでの製作体験ブースに展示していた衝立のほかに、こういうものもある、と工房の奥から運び出してくれた作品に、息を呑む思いがした。何という精緻さ。豪華さ。美しさ。サイズは障子１枚の３×６板（約90×１８０㎝）で、掛け軸のように壁などにかけておく「掛け障子」というのだそうだ。これ１枚でがらりと部屋の雰囲気を変えてしまうほどに〝力〟がある。技の力だ。

あらかじめ図面に描いた構図があるのかと思いきや、「桜や亀甲や麻、胡麻といった基本の紋様はありますが、それらを

いろいろ組み合わせて作るわけだから、初めからこれだと決まった形はないんですよ」と藤田秀晴氏は笑う。それだけに、磨かれた感性と技術が求められるのだろう。

祐貴さんが、決意を表わすようにこう話す。「ただ伝統の技術を引き継ぐだけじゃなく、通常の仕事を通じて、発信していこうと思っているんです。こっちから、障子の桟にワンポイントとして組子をあしらったデザインを提案するとかね」

そうすればきっと施主は喜ぶはず。そんなかたちで少しずつ組子が現代の暮らしに溶け込んでいけばいいな——と。師匠の父親が製作した見事な「掛け障子」の域には10年で到達できる、と意欲を示した。

■藤田建具工芸
青森市油川字岡田77-4
☎017-788-4799

組子技術の粋が詰まった精緻で豪華な「掛け障子」

# 木が取り持つ縁
# 木婚（もっこん）教室

**木工室の工作台を挟んで、窓側と、反対の壁側に、若い男女が向かい合って立ち並んでいた。場所は、東北町の道の駅おがわら湖の隣にある「小川原湖交流センター」。対面する女性9人、男性9人の間に立つ織笠拓重さん(㈲織笠工務店社長)が、列の端の若者へ手を指した。「では、まず男性から、お一人ずつ自己紹介をお願いします」――木工教室と婚活をコラボした『木婚教室』がこれから始まるのだ。**

## 木工教室と婚活とのコラボ 若手大工が木工女子を指導

「えーと、名前は○○です。職業は大工です。出身地は○○で、今は××に住んでいます。好きな食べ物は……」

男性の次は、その真向かいの女性。「……福祉関係の仕事をしています。……好きな食べ物はパスタ。嫌いな食べ物はグリーンピースとかシイタケとか……」

男性9人のうち大工が7人、現場監督が1人、内装業が1人で、全員が建設業。青森県建設組合連合会に所属する彼ら若手が、今までカナヅチやノコギリをほとんど手にしたことのない女性たちに木工を優しく指導してくれる、というしつらえなのだ。参加した〝木工女子〟が、「気(木)が合う人に出会えるかも♪」しれない――その名もユニークな「第1回わくわく木婚教室」である。

自己紹介が終了すると、女性たちが6台ある工作台に分散して座った。うまく工夫したのは、男性たちの座る場所である。女性が座ったテーブルの上に、四角い板のコースターを2つに切り分けた片方が置いてある。その切り口にぴったり合っ

た片方を持つ男性がその女性と同じテーブルに座れるのである。

「気に入ったひとのところに座りたいからってズルすればダメですよ〜」

主催者の中野晃治さん(ウッドランドなかきち・㈲中吉製材所社長)のジョークに笑い声が広がった。

『木婚教室』の命名は、中野晃治社長。実は中野社長は、2012年から小学生を対象に61回も続いている「木工教室」の仕掛け人(織笠拓重社長が協力)で、それを若い男女を主体にした婚活に生かせないか、と企画を暖めてきたのだそうだ。

差し金やノコギリを使いながら飾り棚づくりに励む参加者たち

『わくわく木婚教室』木工女子大歓迎！　参加者募集――それをネットで知った9人の女性から応募があり、第1回目の開催にこぎ着けた。

## 青森スギで私の飾り棚 差し金当てて線を引く

今回製作するのは、世界でたった一つの「私の飾り棚」。工作台の上に置かれた青森スギの板で作る。細い丸棒は棚の下部に取り付けるキーホルダーのフックとなる。織笠社長からノコギリやカナヅチ、差し金などの使い方の説明を受けてから、始まった。

まず板に差し金を当てて、鉛筆で線を引く。これが墨付け。差し金とは、曲尺(かねじゃく)とも呼ぶ直角になった物差しで、直角ばかりでなくいろんな角度に線を引くことができる大工道具の一つだ。女性たちが、慣れない手つきで墨付けした線の上にノコギリをあてがい、引く。刃が、線からずれた。板の端を抑えてやりながら若手大工が、「細かに刃を動かしてキズをつけてから引けば切りやすいですよ」とアドバイス。「あ、ほんとだ」と女性が笑顔を上げてうなずく。

ノコギリを手にするのは初めてという女性もいれば、中学以来という人も。いずれにせよノコギリも差し金もカナヅチも女性陣にとっては身近な物ではないが、切ったり、釘を打ったり、ボンドでくっつけたりしているうちに楽しそうな表情に

コースターの切り口がぴったり合えば同じテーブルにすわれる♥

板に線を引いたり切ったりしているうちに顔がほころんでくるところが木工の魅力

なってくるところが木工の魅力である。

「はーい、タイムアップでーす。移動してくださーい」

中野社長が声をかける。男性陣が隣のテーブルに移って、「よろしくお願いします」と女性に挨拶。工程ごとに移動して女性全員と顔合わせをするようになっている。

「おぉ、うまい」と、線のとおりにうまく切れた女性がおどけた声をあげる。そばから男性が、「すばらしいじゃないですか」とフォロー。緊張がほぐれてきたようだ。

この5年間に61回も木工教室を開いてきた中野社長は、「子供の頃から親しんだものが身になるのです。木の感触は大人になっても手のひらが憶えています。木と遊ぶ成長過程があってこそ、やがて家を建てようというときに県産材と結びつくはずです」と話し、「木婚教室で結ばれたカップルが、今度は自分の子供を木と親しませていってもらえれば」と期待を寄せる。

わくわく木婚教室のパンフレット

織笠社長は、「建設業だけでなく、農業や漁業など各業界ごとに婚活をやればいいと思うんですよ。農婚教室とか漁婚教室とかね。農業なら野菜や花の育て方、漁業なら魚の釣り方とか。でも、木工を通じて婚活したいと依頼されれば喜んで応じますよ」

〝木が取り持つ縁〟――が今後、数多く実っていってほしいものである。